

防犯性からみた住民による公園管理活動の効果

住宅・都市研究グループ 研究員 樋野 公宏

はじめに

公園は、地域コミュニティの場であり、緑のまちづくり、防災まちづくりの観点からも重要な公共施設である。しかし近年では、公園における犯罪が増加しており、内閣府「治安に関する世論調査(2004)」でも犯罪に遭うかもしれない不安な場所として上位になるなど、その存在が住民の不安要因となるケースさえ見られる。また犯罪行為でなくても、公園施設への落書きや破壊行為、園内での若者のたむろなども住民の不安要因となっていると考えられる。一方で、住民参加の潮流のなか、地域住民が無償ボランティアとして公園の清掃や除草などを行う動きが見られる。このような住民による公園管理活動は「アドプト(里親)プログラム」と呼ばれる。

本研究は、東京都板橋区を対象に、公園利用時の犯罪不安に影響する要因が住民による管理活動によってどう改善されるか、またそれらの要因が犯罪不安に繋がる構造を分析し、防犯まちづくりの視点から住民による公園管理活動の評価・展望を行うことを目的とする。

まず、区担当課、警察、里親グループへのヒアリング、区内公園の現地調査、里親活動への参加等により、里親制度の運用状況を把握し、本研究の対象とする里親公園を選定した。次に、板橋区に寄せられる公園行政に関する意見・苦情等(以下、苦情)を分析し、犯罪不安を誘発しうる項目を抽出した。そして里親公園周辺住民へのアンケート調査で、2つの里親公園、18の非里親公園から1つずつ選んでもらい、上記項目についてそれぞれ評価してもらった結果を分析した。

犯罪不安関連項目の評価

板橋区に寄せられる苦情の分析等から、表1に示す18項目の犯罪不安関連項目を抽出した。アンケート調査で、各公園についてこの18項目を評価してもらい、-2点(不満)から2点(満足)の得点とした。その平均点を里親公園と非里親公園を比較(T検定)した結果、18項目中15項目で有意な差が見られた(有意水準=0.1)。特に、項目1,3,7,17において、里親公園が非里親公園より1点以上高得点だった。項

表1 犯罪不安関連項目

1	樹木が茂って公園の外から見通しが悪い
2	花や植栽が抜かれる・盗まれる
3	夜間、公園内が暗い
4	水飲み場、手洗い場、トイレなどが壊されている
5	ベンチや遊具などが壊されている
6	落書きが多い
7	ゴミが散らかっている
8	ゴミの不法投棄が多い
9	放置自転車・放置バイクが多い
10	夜中に若者がたむろして騒ぐ
11	放火・痴漢など実際の犯罪が起こったのを耳にする
12	不審者を見かけることが多い
13	公園の水道で洗濯や洗車などをしている人を見かける
14	公園内で飲酒している人を見かける
15	公園内でたき火する人を見かける
16	公園内でペットを放し飼いにしている人を見かける
17	手入れが行き届いている
18	利用者が多い

目1,7,17については、里親グループが自ら公園の清掃や手入れを行い、グループでできない部分も区に要望するなどして対応した結果と考えられる。項目3については、里親活動により公園の領域性が確保された結果、あるいは電灯が切れた場合も早期に発見して対応を求めた結果と考えられる。

同様に、里親公園と非里親公園のそれぞれについて公園利用時の「安心感」を得点化した。そして、上記18項目に「里親公園であることを知っているか」(知っている=1点、知らない・里親公園でない=0点)を加えた19項目の平均点と「安心感」との関係を調べるため一元配置分散分析を行ったところ、項目2以外で有意な差が見られ、全項目でおおむね「安心感」の水準が高いほど高得点になった。

分析・考察

1) 探索的因子分析

共分散構造分析に先立ち、上記19項目から項目2を除いた18項目について探索的因子分析(最尤法、プロマックス法)を行った結果を表2に示す。なお分析の過程で、因子数を4(累積寄与率57.72%)とし、各因子への負荷量が小さかった項目16を削除した(最大0.276)。因子分析の下位尺度

の信頼性を検討するため、各因子について 0.3 以上の負荷量を示した項目を尺度として 係数を算出したところ、因子 1,2,4 では 0.8 前後の高い値をとり、因子 3 でもまずまずの値 (0.607) であった。

次に因子の解釈を行った。まず因子 2 に高い負荷量を示した項目は、設備が壊されたり落書きされたりというものであることから、因子名を「破壊行為 (バンダリズム) の痕跡」とした。因子 4 に高い負荷量を示した項目は、ゴミや放置自転車に関するものであることから、因子名を「ゴミの散乱・不法投棄」とした。ここで、因子 1 に高い負荷量を示した項目は、(因子 2,3 の項目以外の)望ましくない行為や人物の見聞経験に関するものであることから、因子名を「望ましくない人物・行為の見聞」とした。最後に、因子 3 に高い負荷量を示した項目のうち、項目 1,3 は防犯環境設計 (CPTED) における「監視性の確保」に関する項目で、その他は「領域性の確保」に関する項目であることから、因子名を「領域性・監視性の確保」とした。

因子分析の結果を見て、各因子の上位 4 位以内かつ因子負荷量の絶対値が 0.4 以上という条件を満たす 13 項目を、共分散構造分析で観測変数として扱うこととした。

表 2 抽出された因子と各項目の因子負荷量

	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4
寄与率	31.68%	10.36%	6.95%	6.59%
係数	0.796	0.778	0.607	0.813
項目 1	0.046	0.018	0.554	0.047
項目 3	0.216	-0.066	0.503	-0.010
項目 4	0.086	0.639	-0.153	0.044
項目 5	-0.092	0.865	0.055	-0.065
項目 6	0.060	0.568	0.097	0.090
項目 7	0.017	0.001	0.192	0.707
項目 8	0.013	0.020	-0.008	0.898
項目 9	0.092	0.355	0.007	0.334
項目 10	0.525	0.066	-0.183	0.179
項目 11	0.661	0.162	0.094	-0.247
項目 12	0.783	-0.107	0.060	-0.023
項目 13	0.476	-0.030	-0.017	0.209
項目 14	0.672	-0.094	-0.089	0.130
項目 15	0.488	0.192	0.023	-0.056
項目 17	-0.090	-0.034	0.656	0.084
項目 18	-0.215	0.007	0.339	0.073
里親認知	0.058	0.040	0.469	-0.060

因子抽出法: 最尤法、回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法 (網掛けは 0.3 以上)

2) 分析・考察

1)で選んだ 13 項目と「安心感」を観測変数とし、抽出した 4 因子を潜在変数とするモデルを作成し共分散構造分析を行った。途中、相関係数が 1%有意を満たさなかったパスを逐次削除し、図 1 の分析結果を得た (数値は標準化解)。

この分析結果を見ると、公園の有する「領域性・監視性」が利用時の安心感に大きく寄与する (パス係数: 0.64) 一方、安心感が損なわれる理由としては、施設への「破壊行為の痕跡」が若干影響する (0.12) だけで、他の潜在変数の直接の影響は小さい。「領域性・監視性」は園内の「ゴミの散乱・不法投棄」と共変関係にあり (0.63) 領域性や監視性の確保によってゴミを捨てにくい状況が生まれる一方で、ゴミのない手入れの行き届いた環境が領域性に寄与するという双方向の関係にあると考えられる。また「領域性・監視性」は「望ましくない人物・行為の見聞」も抑える方向に影響する (0.20) が、「破壊行為」への影響は比較的小さい (0.10)、これは人目の及ばない夜間に破壊行為が行われるためと考えられる。

ここで「ゴミの散乱・不法投棄」、「破壊行為の痕跡」、「望ましくない人物・行為の見聞」の 3 つの潜在変数の関係を見ると、「ゴミ」、「破壊行為」は「望ましくない人物・行為」に影響し、特に後者の影響が大きい (0.50) また「ゴミ」は「破壊行為」にも影響する (0.56) ことから、散乱した、あるいは不法投棄されたゴミが放置されていると破壊行為が行われるようになり、さらには望ましくない人物や行為が見聞されるようになるという環境悪化の流れが見出される。

以上、本研究の分析により、里親活動の中心である清掃・美化が領域性の確保や破壊行為の抑止に繋がり、利用時の安心感を生んでいることが明らかになった。

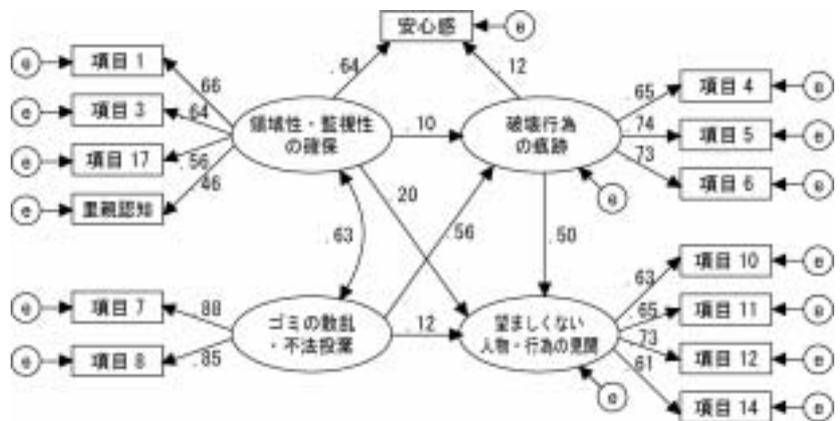


図 1 共分散構造分析の結果 (標準化解)